

11月の株ゆるめでクリの凍害を防ぐ

産地再生、優良品種育成を契機としてクリの新植が進んでいる。しかし、導入園は作業性等の面から排水性の劣る水田転換園が多く、凍害の危険性が高い。そこで、株ゆるめ処理^{*1}を再検討し、処理時期は11月、フォーク型バケットや試作チゼル^{*2}装着のブレーカ^{*3}処理の凍害抑制効果が高いことを明らかにした。

内 容

暖秋、暖冬年が多くなり、クリの凍害が目立つようになった。すでに、凍害対策として株ゆるめ処理を開発したが、適用可能な条件が限られていた。そこで、当センターは（独）農研機構近中四農研、関係普及センターと共同で、普及性の高い手法を検討している。

従来の株ゆるめ処理は、早春期の凍害を対象とし12月下旬～1月上旬に行った。しかし、数年に一度は初冬期の凍害もみられるため、処理時期を検討した。油圧ショベルの慣行バケットを用い、2～4方向から4年生「筑波」の株全体を10cm程度持ち上げた。その結果、芽の耐凍性^{*4}は各処理後に高まり、11月区は12月以降、他の区も3月には無処理より高まった（図1）。凍害は無処理のみで発生し、3樹中2樹が枯死した。

処理法では株を持ち上げやすいフォーク型バケット（表紙写真）、樹高にかかわらず処理可能なブレーカ処理（二又チゼル装着）を2年生「銀寄」に対し12月と1月に行った。芽の耐凍性は処理後に高まり、3月には慣行バケットは無処理と差はなかったが、フォークとブレーカは2℃以上高かった（図2）。凍害は無処理のみ5樹中4樹で発生し、3樹が枯死した。

以上のように、株ゆるめの処理時期は11月が優れた。また、フォーク型バケットやブレーカによる

処理も慣行バケット同様凍害抑制効果が高かった。

今後の方針

改良法の現地実証を行うとともに、狭小な園地における処理技術を確立する。

水田 泰徳（農産園芸部）

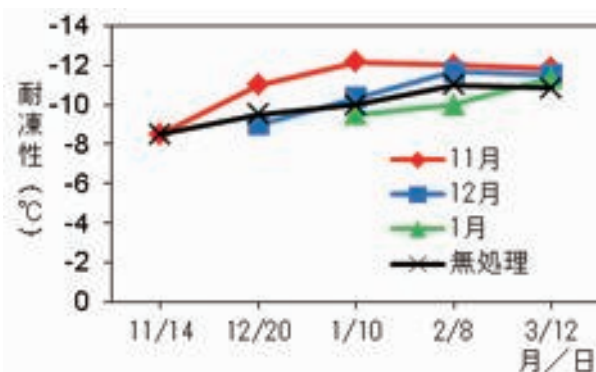


図1 株ゆるめ処理時期と芽の耐凍性

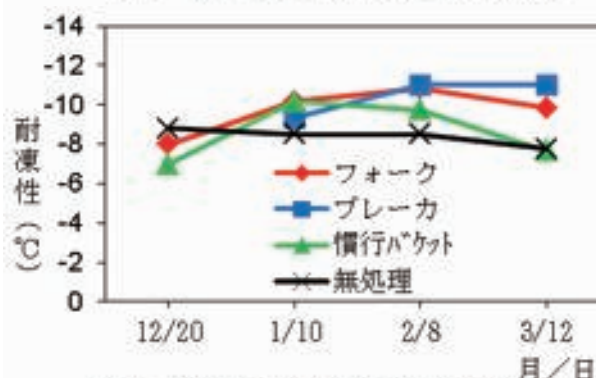


図2 株ゆるめ処理法と芽の耐凍性

（問い合わせ先 電話：0790-47-2424）

*1：早春期の根からの吸水を抑制するため、油圧ショベルの通常のバケットでクリ樹の株を10cm程度持ち上げ、軽い断根と土壌改良を行う処理。

*2：ドリルや削岩機などの先端の作業部位。

*3：岩盤や建造物を破碎する機械。

*4：凍結に耐えて枯死しない温度